

# 運動にあらたに参加する構成員の 運動の理念とのつきあい

—— 遺児学生があしなが運動において形成する重層化した秩序 ——

富 井 久 義

## 1. はじめに

本稿は、遺児支援活動を展開する「あしなが運動」の担い手とされる「遺児学生」の取り組みを、遺児学生自身とその集まりにおいて形成する秩序に注目しつつ読み解いていくものである。これによって、比較的長い期間にわたって展開する運動にあらたに参加する構成員の動員の問題を扱うに際して、構成員が運動の理念をどのように取り扱うのか、に注目することの重要性を示すことをめざす。

「あしなが運動」は、交通遺児支援に端を発する40年にわたる歴史をもつ遺児支援の運動である。これまで一貫して運動を率いてきたのは、社会運動家の玉井義臣である（副田義也 2003）。運動は現在、あしなが育英会をその組織的基盤とし、病氣・災害・自死遺児に対する奨学金貸与、学生寮運営、教育、心のケアなどの各種事業をおこなっていて、最近では海外遺児支援事業にも力を入れている。

あしなが運動の特徴は、寄付を得てはそれを費やすことによって遺児支援を展開していることにある。事業支出は、すべて寄付収入によってまかなわれている。運動の手がける事業の主力である奨学金貸与事業は現在、単年度で6,000人を越える奨学生を有しており、その貸与総額は年間22億円を越える（あしなが育英会2011）。運動は、自らの事業によって継続的に維持に対する支援をおこなうという性質をもつ以上、継続的な寄付収入が担保される必要がある。そのため、寄付を募る事業が、実際に遺児を支援する事業と並んで重要性をもつ。寄付収入のうちで代表的なのは、継続的に奨学金を送金する「あしながさん」制度による寄付<sup>1)</sup>と、街頭募金「あしなが学生募金」による寄付である。

本稿はこのうち、あしなが学生募金を取り上げ、とくにその担い手である遺児学生に着目する。「遺児学生」とは、そのほとんどがあしなが育英会大学奨学生である。400人ほどの遺児学生が、全国でおよそ200箇所の街頭に立って、遺児の置かれる現状について人びとに訴え、募金を呼びかける。あしなが学生募金は年に2度のキャンペーンによって、3億円を超える寄付を集めている。

遺児学生があしなが運動の担い手であることは、あしなが運動のもつ「恩返し運動」の論理によって説明される。ごく簡単にいえば、あしながさんに代表される寄付者から奨学金を受け取るというかたちで受けた「恩」を、社会に返してゆくひとつの手段として、遺児学生は活動に取り組むことになっているのである<sup>(2)</sup>。

そして遺児学生は、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組んでいることを表明するかのように、しばしば、自身の親を亡くした経験を話すことによって、遺児の置かれる現状について人びとに訴える。それは、自身が運動に携わる動機となり、あるいはまた、かれらが支援しようとする遺児の姿に重なる。街頭においてはときに叫ぶようにして、「自分史」と呼ばれるその経験は語られるのである。

私は……父親をガンで亡くしました。父の死後、将来への不安が常にありました。しかし、私は、あしなが育英会の奨学金によって進学することができ、希望を見出すことができました。遺児が自分の力で貧困から抜け出し、格差社会に立ち向かえるようになるためには、教育を受ける機会を平等に得ることが必要です<sup>(3)</sup>。

「恩返し運動」の論理は、遺児学生にとってだけでなく、あしなが運動全体にとってもっとも重要な論理のひとつとなっている。「恩返し運動」の論理が重要なのは、それが、遺児学生を動員するための論理として機能しているだけでなく、同時に、寄付を獲得するための論理としてももちいられているという側面があるためである。すなわち、遺児学生を「運動の主役」(玉井 2010:273)として活動を展開することは、人員を確保して活動を全国規模で展開してゆくことを担保するためのみならず、寄付を得て進学した奨学生の姿を人びとに向けて可視化することで、寄付の有効性をその奨学生の姿において示すためでもある。「恩返し運動」として遺児学生があしなが運動の担い手となることは、あしなが運動が寄付を獲得するための戦略のひとつとして見いだされる論理なのである<sup>(4)</sup>。

このため、「恩返し運動」の論理にもとづいて運動を展開する限り、あしなが運動の担い手は遺児学生である必要がある。そして、あしなが育英会は大学奨学生に対して、奨学金貸与の条件として2期1年にわたって活動に参加することを求めている。このようにしてあしなが育英会大学奨学生をあしなが学生募金に動員するという構造は、毎年多くの構成員が参与しては離脱し、入れ替わるなかで活動が成り立つことを帰結する。すなわち、活動は、毎年500人を超える大学奨学生の活動への参与をもたらしこととなるのであるが、活動に参加することとなった大学奨学生の大半が最低限の「義務」を果たすと活動から退いてしまうのである。そのなかでも継続的に活動に取り組みつづける遺児学生によって、活動は成り立っている<sup>(5)</sup>。

本稿の関心は、このような動員構造のなかで、継続的に活動に参加してあしな

が学生募金の担い手となる遺児学生が、どのようにして活動に取り組んでいるのか、ということにある。

先取りしていうならば遺児学生には、活動の場における振る舞いの水準と活動についての語りの水準にギャップが見られる。遺児学生は、活動の具体的な局面においては「自分史」を街頭で語り、あるいは動機に対する言明をおこなってあなたも「恩返し運動」の担い手として振る舞うのにもかかわらず、遺児学生の活動についての語りの水準では、かれらはそうした振る舞いを、役割距離をとりながらおこなっていたのだと呈示してみせるのである。これがあしなが運動における遺児学生に見られる特徴であり、本稿が注目する点である。

さらに議論を先取りしていっておけば、遺児学生がこのようなギャップを見せながら活動に取り組むのは、かれらにとって、あしなが運動の理念の取り扱いが、活動に参加しつづけるにあたっての課題となっているためである。遺児学生は活動に取り組むなかで相互に運動のもつ理念を取り扱うための秩序を形成し、重層化した秩序のなかで自らの楽しみをそれぞれに見いだしているのである。

なお、ここで本稿の構成について記しておくとして、まず、つぎの第2節において先行研究と分析視角の検討をおこなう。つづく第3節では、遺児学生にとってのあしなが運動に期待される役割の取り扱いかたについて考察する。さらに第4節では、遺児学生のあいだで「アツい想い」と呼ばれる、活動に取り組む姿勢をめぐって形成される秩序をとらえる。そして、第5節において、遺児学生が活動に見いだす楽しみを取り上げ、第6節で本稿のまとめをおこなう。

## 2. 先行研究と分析視角

あらたに運動に参加する構成員の動員の問題をとらえる既存の社会運動研究に通底することのひとつは、対象となる運動体の理念に照らした構成員の動機を探索することである。

たとえば西城戸誠（2008）は、1990年代半ばから2000年代半ばにおける「生活クラブ生協協同組合北海道（生活クラブ生協・北海道）」が以前と比較して活動が沈静化した要因を考察している。要約的にいえば、西城戸は、生活クラブ生協・北海道の理念を受け入れて積極的に活動に参加するという、組合員としてのアイデンティティを確立することが、組合員にとって構造的に困難になっていることにその要因を求めている<sup>(6)</sup>。

あるいは脇田健一（1997）<sup>(7)</sup>は1980年前後をピークに大々的に展開した滋賀県の石けん運動を事例として、ひとびとに現れた変身<sup>(8)</sup>をとらえ、「喜びとしての変身」と「強制としての変身」というふたつの変身の緊張関係のうちに、運動にかかわったひとびとの存在を把握している。すなわち、前者の変身をするひとびとは、内的な必然性をともなった創造的な存在として把握され、後者の変身をするひとびとは、組織体の力によって規定される存在として把握されるのである<sup>(9)</sup>。

いずれの研究も、対象となる運動のもつ理念が構成員にとっていかなる魅力をもつか（／もたないか）に着目した分析をおこなっていて、そこでは運動の理念のもつ魅力は前提とされている。だがここで、原田隆司のボランティアにかんする研究を参照するならば、それは運動の理念のもつ魅力とはかかわりのないところで構成員が運動に参加する可能性を示唆するものとしてとらえるものであることに気づく。

すなわち原田隆司（2000；2010）は、「ボランティアを『する側』の意志や姿勢だけ」（原田 2010：iii）からとらえる理解に対して、活動における相互作用やそれによって形成される人間関係に注目する視角を提起している。そして原田（2006）においては、この視角が「する側」のあいだの人間関係をとらえる視角に応用され、若者と大人の相互作用の場としてボランティア活動を取り上げて、世代間の関係としての若者論が試みられている<sup>(40)</sup>。原田はここで、若者たちがむしろ人間関係を活動の中心に据えていて、活動の現場での判断や反応そのものも、大人たちによって導かれようとする傾向にあるとしている。すなわち、原田のとらえる若者たちは、脇田のとらえるような、活動のめざすところとの関係における変身の魅力というよりも、むしろ、その活動によって形成される人間関係にこそ魅力を感じているということができるのである。若者たちはその魅力のためにこそ感情をコントロールし、自分自身を参与しているボランティア活動に位置づけてゆくのである。

敷衍しているならば、運動に参加する人びとは、その動機づけを運動の魅力だけによって説明されるのではなく、人間関係といった、かれら自身によって発見された魅力によってもまた説明されうるということである。

ただし原田の議論では、活動によって形成される人間関係に魅力を感じながらも、あるいは魅力を感じるからこそ感情をコントロールしてゆくということが、若者においてどのように成り立っているのかということについて、やや判然としない。それは、原田もまた、因果論的に若者の活動への参与をとらえることの帰結であると考えられる。

そこで原田の議論を踏まえてさらに検討すべきは、活動に魅力を感じているとして、それを確保するために構成員がどのように活動に取り組むのか、ということである。すなわち、運動の理念のもつ魅力とはかかわらないところでの構成員の活動への参与を考えると、運動の理念とは異なる魅力を見いだしてもなお考えなくてはならないのは、運動の理念が構成員に要請する秩序との構成員の関係である。言い換えれば、構成員の運動の理念やそれにもとづく秩序とのつきあいかたを検討する必要があるのである。本稿はこの点をとらえる視角を提起する。

こうした視角からあしなが運動に参加することとなる遺児学生をとらえるにあたっては、E. Goffman の役割概念を援用してゆく。それは、運動の理念や秩序を相対化してとらえることを可能にする概念である。

それはとくに、本稿が事例として取り上げるあしなが運動のように、比較的長

期にわたって展開する運動にあらたに参与することとなる構成員をとらえる際に重要となる視角であるように思われる。運動は次第に制度化し、その理念は構成員にとって必ずしも魅力をもつというわけではなく、むしろ時代が下るにつれ適合しなくなってゆく可能性を孕む。あらたに参与する構成員にしてみれば、運動の理念や秩序は、かれらとの相互作用によって形成されていくというよりはむしろ、すでに形成された、いわば所与のものとしてとらえられるものである。そのような状況における立ち振る舞いかたを会得した上にこそ、活動への継続的な参与というのがありうるのである。

なお、遺児学生の振る舞いと語りを考察するにあたって特に中心的な発想は、Goffmanを援用した議論を展開したJ.-C. Kaufmann (1995=2000)<sup>(11)</sup>のいう役割概念に負うところが大きい。Kaufmannは、人びとが役割に執着することについて、「役はその人の外側にあるのではなく、制約でもないことを示す理由があるからだ」と述べている。「制約どころか、役割は自分を作る道具であり、自分がイニシアティブをとるスペースを広げるものなのである」(Kaufmann 1995=2000:313)。すなわち、「役割との距離が増せば、自分に課せられる制約が増えるが、完全に役割にはまると外圧は減少する。役割に深くはまり込みすぎないように慎重に臨むなどということは稀だというのが理解できる。自分にかかる制約を少なくするのにいちばんいい方法は、役割に従い、役割を自分のものにしてしまい、役割として演じていることを忘れるまでに一体化することだ。それはつまり役割を演じるのではなく、役割自体になりきることである」(Kaufmann 1995=2000:314)。つまり、役割という基準があることによって、人びとは「よけいな疑問を感じずに自分自身でいられて、行動の自由があり、自分と同類の者たちがいる、安心感を与えてくれる空間」(Kaufmann 1995=2000:322)を確保する可能性を有するのである<sup>(12)</sup>。

以上を踏まえて、次節以降では、あしなが運動に参与することとなる遺児学生が、運動の理念や秩序を活動において具体的にどのように取り扱うのかを記述していく。

### 3. 「恩返し運動」の担い手をめぐって形成される秩序

#### —— あしなが運動に期待される役割の取り扱い

#### 3. 1 振る舞いの水準において期待される役割の遂行と語りの水準における役割距離の呈示

まずは、遺児学生が「恩返し運動」の論理にもとづいて運動に参与しているという説明を忌避するようなBさんの発言を検討する。

やる気あるやつだけで、[活動をやるん] だったらみんな辞めちゃうんじゃないですか？ 「そんな重い」とかって。みんな「もう無理」とか。「ア

ツイ」みたいな。余計キモい団体ですから。「救うんだー！」みたいなのをやりはじめたら<sup>(13)</sup>。

彼女の発言からうかがえるのは、活動には「やる気あるやつだけ」なのではなく、「やる気ある」とは限らない遺児学生もいるということである。そして、彼女はこれに肯定的な態度を示している。

とはいえ、「余計キモい団体」だということからは、Bさんは、あしなが運動をなにがしか「キモい団体」だというような認識をしているということもうかがえる。彼女が「キモい」と感じているのは、活動に携わる先輩の遺児学生が、学校にも行かずに活動ばかりに精を出していると見えること、それに、かれらが「遺児が遺児が」と、遺児ということばをキーワードに活動を語ることである。

最初はまじいやでした。気持ち悪い団体みたいな。気持ち悪いっていうかなんか、なにしに大学来てんだろうみたいな、先輩とか。けっこうなんかみんな、同期たちとでいったのが、「学校行かないで、なんで活動やってんの？」みたいな。……

「遺児が遺児が」みたいな。もういままでいなかった世界じゃないですか。なんかすごい自分がふつうのひととは別なんだなって思いました。

彼女にとってみれば、遺児であることは、あしなが育英会の奨学金を利用する際にその貸与の条件として意識されること以上のものではないのにもかかわらず、それがあしなが運動に携わることによって、特別なこととして意識させられることとなる。Bさんにとって、それは、戸惑いをもって迎えられる。

なんか別にそんなにお父さんがいないことが特別な？ 的な。

そのため、Bさんは、自身がこうした遺児を主題に据えて活動することに距離をとっているのだということを筆者に語り、呈示するのである。

別に実感ないですからね、正直。自分らが募金やってて、遺児学生が学校に行ける、行けたっていう。自分らの活動でっていう実感なんてまったくないですからね。お金集まった、いくら集まったっていうそれぐらいしか。「なにごともなく終わったー」みたいな。

さらに話を聞いてゆけば、Bさんは、具体的な活動の場面においても、一見それとはわからないようなやりかたで、役割距離をとっているのだと語る。たとえば、活動には準備段階でおこなわれる会議があり、その話し合いの場面では、自身が活動に取り組み意義について意見を交わす機会がある。会議でこのような議

題が取り上げられるのは、この活動でしばしば見られる光景である。彼女はその場面で、「模範解答みたいなの」を述べているという。それは、「誰にも非難されることなく、無難に、平凡に」やってゆくことを可能にするものであるという。

でも模範解答みたいなものってあるじゃないですか、やっぱ。その「高奨生のつといでこういう子に会って」みたいな。「そういう子助けたいって思った」みたいな。……正直なところ。原稿があるんです、ちゃんと。……孤立したくないっていうか、まあなんか、「こうやってやるとけば無難かな」みたいな。……誰にも非難されることなく、無難に、平凡に。

そしてまた、Bさんは、街頭で「自分史」を語ることにしても、同様のことをいっている。彼女は「自分史」を語ることに抵抗を感じるというながらも、事実だけを並べるかたちで、そこに感情を差し挟まないようにすることで、「自分史」を街頭で話しているのだといい、役割距離をとっていることを筆者に呈示しようとしている。そのようにしてでも「自分史」を話すのは、「変に決まりになって」いるからだとしてBさんは話す。

〔「自分史」を街頭でいうのは〕抵抗はありましたね。……たぶんやんなかったですね。1年のそんなときは。……〔いまは〕だって、そっちのほうが〔お金を示すジェスチャーをする〕。

やっぱあれなんじゃないですか？ 実際そういう〔親を亡くした〕経験をしてきたひとたちがやってる団体なんで、一番。しかもそのほうがやっぱりまわりの後輩のやる気になるじゃないですか。……やる気っていうか、一回いわれたんですよ。誰かやなくて「なんであのひといわないの？」みたいな。なんていうか。変に決まりになってないですか？ いうのって。……なんかそういう雰囲気があるじゃないですか。

〔「自分史」をいうときは〕なんで〔親がいなくなったのか〕とかはあんまいわないですよ。……いついなくなって。で、まあ大学行くにも奨学金ないと行けないみたいな。

〔実際は〕話したくないです。思い出したくもないです。基本、思い出すのもやだし。

すなわちBさんは、活動のそれぞれの場面で要請される役割として、会議の場面で自身が活動に取り組む意義を述べたり、街頭で「自分史」を語ったりするという解釈を加えるかたちで活動の経験を語ることによって、活動において役割距離をとっているということを筆者に呈示しているのである。

そして、この語りは同時に、活動に参加する遺児学生が「やる気あるやつだけ」ではないということを示そうとするものでもある。

### 3. 2 「アツい想い」をもつまわりの遺児学生を見いだす

Bさんの話のなかでさらに特徴的なのは、Bさん自身は活動の具体的な局面において役割距離を呈示していると話すのにもかかわらず、同時に、「救うんだー！」という「想いをもってるひとが発信」することが大事だとも述べている点である。

想いをもってるひとが発信して、じゃあがんばんなきゃって思いますけどね。……〔学生募金の代表である事務〕局長っていうか、前に出るひとたちはやっぱもってて、でこう発信していかないと、下はついていかないんじゃないですか？ じゃないとなんでこんな募金やるのかもわかんなくなる。

彼女は、まわりの遺児学生に「想いをもってるひと」を求めている。それは、Bさんが「アツい」と評した「遺児が遺児が」といい、活動に没入している遺児学生の姿に重なる存在である。また、それは「恩返し運動」の論理において想定される、遺児問題についての関心を自身のもものとして引き受けて活動に取り組む遺児学生の姿にも重ねられている。

たまにすごいアツい子とかはいるじゃないですか。なんか「高校生が学校に行けなくて、だからがんばるモチベーションになる」みたいな。

Bさんは、このような遺児学生の姿を、一面では「アツい」ということによって距離をとりながらも、活動においては積極的に必要とされる存在として見いだしてゆく。

そのねらいは、このようなまわりの「想いをもってる」遺児学生の存在を「恩返し運動」の担い手として担保するとともに、それをいわば隠れ蓑とすることによって、「やる気のあるやつだけ」ではない、活動に継続的に参与する遺児学生の集まりを確保、維持することにある。「想いをもってる」遺児学生がいることによってまた、彼女たちは「誰にも非難されることなく、無難に、平凡に」活動に参与しつづけることを可能にする空間をつくりあげようとしているのである。

ただし、さらに注意しておきたいのは、たまにいる「すごいアツい子とか」が語るモチベーションと、Bさん自身が「模範解答みたいなもの」としつつ語っている活動に取り組む意義とは、「高奨生のつどいでこういう子に会って」「そういう子助けたいって思った」というようにして、おなじ形式で語られていて、一見してそこにちがいを見いだせないということである。すなわち遺児学生は、一方で求められる役割に徹しつつ（Kaufmann 1995=2000）、他方で「アツい想い」をもつまわりの遺児学生を見いだして、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組む遺児学生の姿に重ね合わせることで「恩返し運動」の論理を回避しつつ「誰にも非難されることなく、無難に、平凡に」活動に参与することを可能とし



ている。しかしながら、その帰結として、Bさんの見いだす「すごいアツい子」と、役割距離を呈示していると語るBさんのような遺児学生とが、活動において一見しておなじように振る舞うことになってしまうことで、遺児学生は、まわりの遺児学生から向けられる「アツい想い」をもっているというまなざしに対処する必要が生じることとなるのである。

#### 4. 「アツい想い」をめぐる形成される秩序

##### —— 遺児学生相互に期待される役割の取り扱い

##### 4. 1 「アツい想い」をもたない活動への参与

そこで、今度はDさんの事例を取り上げ、「アツい想い」をめぐる形成される秩序を明らかにしてゆく。

Dさんは、具体的に活動を展開してゆく単位である県で、街頭募金の代表を務めた経験をもっている。それはおなじように役職に就いている遺児学生から「[まわりの遺児学生に対して自分のもつ] 想いを伝えろ」といわれる立場である。しかし、「まじめに考えてるつもり」でも、Dさんにはそれに応じたふさわしい「想い」がことばに「出てこない」。そして、そのようなDさんの態度は、まわりの遺児学生には「かわしている」と映るのである。

「[県単位でおこなわれる] ミーティングでは想い伝えろ」みたいな〔こといわれますね〕。……正直いつもは、なんすかね？そのときの状況とかにもよるんすけど。よくいうのが、やっぱり、「ひとと会えるのが楽しい」だとか、なんかやっぱり楽しさを見いだしてる的なことをいって。「だから、いますよ」っていってます。「遺児家庭を救いたい」とか、そういうひともいれば、「こういう後輩がいたから、そういう後輩を助けたい」とかそういうのはけっこう、心にしんみり問いかけてくるようなこというひとはいますね。なんかアツく説明されるんすよね。でやっぱり、Eさんとかけっこうアツくいってるんで。そういうひとは、それでモチベーションがあがってるんだなと。見てます。でも自分は、ちがうなど。そこはそこで。流されないようにしています。……そうすると、けっこうまじめな話してるときもよく、「かわしてる」っていわれるんすよ。Fさんですね。卒業する前に一回、ご飯食べにいったんすよ。で、「Dくんはいつもおもしろいことをいって逃げてるよね」って。まあ、そうなのかな。やーなんか、なんすかね？案外まじめに考えてるつもりなんすけど。出てこないんすよ。

Dさんは、活動に継続的に参与することを「義務」という側面から位置づけているのだが、しかし、「期間限定」と割り切って、「やるからには楽しもう」という気持ちをもっているのであり、「当日とか全力でやってる」のだという。

義務ってことでやってるのも少しはあるんですけど、すべて義務でやってるって思うとやな自分もいるんで。……そこに抵抗してるとたぶん、時間も無駄ですし、あんまり先に進めないんで。義務でやるから、やるのはやるにしても、やるからには楽しもうかな、ということですね。……けっこう時間あるんで、……やっぱり学生のときだけと、ほくんなかで割り切ってるんで。期間限定って感じですね。やるからにはまあ、当日とか全力でやってるんですけど。

#### 4. 2 「アツイ想い」をもっているというまなざし

このように話すのにもかかわらず、しかし、Dさんは「超やる気ある」とまわりの遺児学生に見られることがあるという。かれはこのことを、「ミーティングをほぼ休ま」ず、「一番出席率〔が〕高い」ためであると説明する。

ほく活動、ミーティングをほぼ休まないですよ。たぶん一番出席率高いですよ。で、見かけ上、超やる気あるんですよ。でなんか周りからはよく、「Dはしゃべらないけど、アツいなにかもってる」っていう噂が立ってるんですよ。耳にも入ってくるんですよ。でも直接いわれるんですよ。Eさんからも、「なんかすごい考えもってるんだろうけど、いわない。けどまあそのうち、なんか出ることをすごい期待してるよ」って。

確認しておけば、「想いをもってるひと」というのは、「恩返し運動」の担い手として、「高校生が学校に行けなくて、だからがんばるモチベーションになる」というような「アツイ想い」をいわば本気でもっている遺児学生のことである。Dさんの言明からうかがえるのは、かれ自身は、そのような「アツイ想い」を実際のところもっていないということであり、まわりの遺児学生のなかにこそ、そのような「アツく説明」する遺児学生がいるということである。

それにもかかわらず、Dさんはまわりの遺児学生から、「超やる気ある」と見られるのである。Dさんがこうした立場に立たされるのは、前節でBさんに見たように、遺児学生がまわりの遺児学生のなかに「想いをもってるひと」を見いだそうとしているためである。なお、Dさん自身もまた、まわりの遺児学生に「想いをもってるひと」を見いだしているのは興味深い点である。

すなわち、「アツイ想い」というのは、「恩返し運動」の担い手としていわば本気で「高奨生のつどいでこういう子に会って」「そういう子助けたいって思った」ということのできるような遺児学生であるとされている。だが、まわりの遺児学生が「アツイ想い」をもっているかどうかは、実際のところ、そのような徴候をもっていることによって判断される。その徴候というのは、Dさんの説明するように、活動の集まりに頻繁に参加していることであったり、街頭募金などを「当

日とか全力でやる」ことであったり、あるいは役職に就いていることであったりする。

このような徴候によって「アツい想い」をもっているという判断がなされるのは、すでに確認しているように、本気で「アツい想い」をもっている（と思われる）遺児学生も、BさんやDさんのようにそうした「アツい想い」に対して距離をもっているという遺児学生も、活動の具体的な局面においておなじような動機づけを語ることが要請されているからであり、そしてまた、おなじように「自分史」語りをすることが要請されているからである。つまり、活動の具体的な局面における言明や行動によっては、「アツい想い」をもっているかどうかの判断がつかないという事態が生じているのである。こうした状況にあっては、まわりの遺児学生が実際に「アツい想い」をもっているかどうかを判断することは容易ではない。結果として、その判断において、そのひとが実際に「アツい想い」をもっているかどうかは不問に付されてしまうのであり、むしろ、より「アツい想い」をもっているように見えることこそが重要となる。

このため、まわりの遺児学生に「想いをもってるひと」を見いだすことで、「想いをもってるひと」とおなじように振る舞う遺児学生が、そのように振る舞うことによって、今度はその遺児学生自身が、まわりの遺児学生から「想いをもてるひと」として見いだされるという事態が起こりうる。結果として、「アツい想い」をもっているように振る舞うことが、あしなが運動に継続的に参与する遺児学生にとって、遺児学生相互に要請される規範となってゆくのである。

そしてこの規範は、あしなが運動に取り組む遺児学生を全体として、あしなが運動のもつ論理である「恩返し運動」の担い手として想定される姿に重なるかたちで活動に取り組んでいることを人びとに呈示させるものともなっている。

#### 4. 3 「アツい想い」をもっているというまなざしに対処する

このような秩序のために、「超やる気ある」遺児学生としてまわりの遺児学生に見いだされたDさんは、それを簡単に否定するわけにはいかなくなる。かれは、「そんなアツい想いはないよーとかって、いいたい」と思っている、ひとまず「超やる気ある」という眼差しに応えた振る舞いをすることが求められるのである。

そんなアツい想いはないよーとかって、いいたいです。……〔でも〕いいですね。まずいですね。そこはやっぱりもってるような雰囲気を出します。そのアツい想いをいおうとしても、別にないんでいいないわけですし。かといって、「やる気ないんだよね」っていうのも、ちょっと引け目感じるんで。なんか申し訳ない。とりあえず参加はしてるっていうので。そこで見せれば。

とはいえ、「大げさにとらわれ」てしまって、本気で「想いをもってるひと」ととらえられてしまうことは、Dさんにとってなお避けるべき事態である。そのため、役割距離をとりつつ活動に継続的に参与しているのだということが、活動のいわば裏舞台で同期の遺児学生に対して話すというかたちで、まわりの遺児学生に呈示されることとなる。

……  
いってるひとにはいってるんすけどね。……大げさにとらわれたくないんで。自分の本音をたまにいますけどね。同期にはけっこういってますね。さらっと。「ただ時間あるから行ってんだよ」みたいな。

遺児学生はこのようにして、活動のいわば表舞台においては「アツい想い」をもつものとして役割に徹した振る舞いをおこない、他方で、いわば裏舞台においては、役割距離をとって振る舞っているということを呈示することとなるわけである。

ここで、かれらがまわりの遺児学生に「アツい想い」に対する距離を呈示しようとするのには、ふたつの意味が込められている。すなわちそれは、ひとつには「恩返し運動」の担い手として要請される「想い」をもつことができないということの表明であり、もうひとつには、それにもかかわらずまわりの遺児学生が「アツい想い」をもっているというまなざしを向けてくることを回避するための自己呈示である。

こうした秩序のなかで活動に取り組むにあたって、Dさんは、自身に「アツい想い」がないことを悩む必要はない。むしろ、マニュアルをはずれたところにある、自身の「想い」(のなさ)について本気で訊かれてしまうことにこそ、Dさんは悩むこととなる。

……あんまり、活動に対する想いっつうのはわからないんすよね。実際には。……この想いはその〔県代表〕のときは、さすがに伝えてないすけど。本音伝えるとみんな、ほんと、ちょっと、離れてしまうんで。……たまにやっぱり、悩むときもありますよ。もしその、想いとか、本気で訊かれたらどうしようとか。ぼくはもうほんとマニュアルどおりにしかいけないような男なんです。

活動の場においては「アツい想い」をもっているように振る舞うことが要請されるとはいえ、それは、Dさんが「アツい想い」をもつ遺児学生をまわりに見いだし、そのことによって、要請にしたがって「マニュアルどおり」に動いている結果として可能になっていることである。

そのためDさんが「マニュアルどおり」ならざるかれ自身のもつ「想い」について本気で訊かれることは、Dさんを活動の場において要請される規範と、Dさ

んの「想い」の実際とのあいだの葛藤に直面させることを意味する。すなわち、ここでDさんが活動の規範にしたがって安易に「アツい想い」をもっていると表明することは、かれが「想いをもってるひと」として向けられるまなざしを引き受けることにつながるものであり、それはDさんが自身の論理において活動に参加することを不可能ならしめる結果を招く。

そのためDさんは、活動の場の秩序を尊重していることを示しながら、しかし、その「想い」のなさを表明するということを慎重におこなう必要に迫られている。すなわちDさんは、「学年が上のひとでけっこう役職とか就いてるひと」から「アツい想い」があることを確かめられたとき、すぐに「ないっす」というのではなく、何度も尋ねられるやりとりを慎重にくり返したのちにはじめて「ないっす」ということによって、なんとか「アツい想いはないよー」ということを活動の場において呈示するというわけである。

たまに、学年が上のひとでけっこう役職とか就いてるひとに、訊かれて、最初はなんか、きわどいこといってるんすよね。きわどく。あるようなないような、やる気が。でも最終的になんかもう、「まいいやー」って。「ないっす」。最初はまあ、強いといえば、下の上ぐらいのやる気ですね。ふつうよりちょっと下ぐらいの。

このように遺児学生は、「アツい想い」をめぐって、運動の要請する秩序に対して重層化した秩序を形成している。これまでの議論を整理しておけば、かれらは「恩返し運動」の論理に対処するために、「アツい想い」をもつ遺児学生を見だし、そしてまた「アツい想い」をもつ遺児学生として振る舞うことで、求められる役割を遂行する。これによって遺児学生は自身を活動をする集まりにいわば埋めこもうとして、「恩返し運動」の論理にもとづいて活動に取り組む遺児学生として外部から自らにまなざしを向けられることを避けるのである。そのまなざしの向く先は、類型としての遺児学生であり、より具体的には、まわりにいる「アツい想い」をもつ遺児学生とされるのである。加えて、遺児学生は、活動をする集まりに参加する遺児学生のなかで自身が「アツい想い」をもっている遺児学生として見いだされることを避けるために、活動の舞台裏において、「アツい想い」をもっているということから距離をとっているのだと語ってみせるという秩序をも、同時に形成してゆくのである。

遺児学生は、このように重層化した秩序を形成することによって、運動の理念によって要請される役割や、遺児学生相互に向けられる動機づけについてのまなざしを、自身にとって不問に付そうとしている。かれらは、すでに活動に参加してしまっているという事実を前提において、活動に取り組むに際しての楽しみをそれぞれに見いだそうとするのである。Dさんが「やるからには楽しもうかな」といっていたのは、この意味においてである。

義務ってことでやってるのも少しはあるんですけど、すべて義務でやってるって思うとやな自分もいるんで。……そこに抵抗してるとたぶん、時間も無駄ですし、あんまり先に進めないんで。義務でやるから、やるのはやるにしろ、やるからには楽しもうかな、ということですね。

## 5. 活動において見いだされる楽しみ

それでは、遺児学生が活動に見いだす楽しみとはどのようなものなのか。

遺児学生の語りから明らかになってくる楽しみはごく大まかにわけて2種類ある。それは、活動を遂行するなかに見いだされる楽しみと、活動をする集まりを維持してゆくことのなかに見いだされる楽しみである。

### 5. 1 活動を遂行するなかに見いだされる楽しみ

前者はたとえば、Cさんがいうような、活動における議論をする楽しみである。Cさんは、イベントの発展改善に焦点をあてて、それをめざして遺児学生のあいだで意見を交わしては実行に移してゆく「ゲーム」として、活動を遂行するなか楽しみを見いだしている。

ほくは思想的な部分はまったく興味がなくて。正直どうでもいいですよ。遺児を助けようが国内のだろうが国外だろうが、そういうことは割とどうでもよくて、ほくは……イベントのことの発展改善にしか興味ないんですよ。で、その結果というか見えてくる成果として支援があるんだから、その支援もちゃんとしましよっていう。別に、支援、なにをするかっていうのはあんまり興味がないですね。……こういうのを一般的には職員とか認めたくないと思いますけど、ほく、なんか仕事感覚っていうか、ゲーム感覚っていうか。どうやったらでかくできるのかとか〔を考えてやってます〕。

あるいは、Gさんのいうように、自己鍛錬の場として活動における経験を位置づけてゆく楽しみというものもある。すなわち、Gさんにとって、活動に取り組むことによって直面することとなるあらたな経験を、かれにとっての学びの機会ととらえてゆき、その学びのなか楽しみを見いだしてゆくというものである。その学びにおいてGさんの目の向く先は、遺児問題についてというよりは、むしろ、活動によって経験されるGさんの体験それ自体である。

まあ、忙しいと思ったこともありますけど、なんですかねえ。いってしまえば大学のときだけです。基本的にかなりポジティブなんです。考えたのは、なんで、そういう忙しいのをこなせるようになろうっていう風にと

っちかっていうと思うんで。……もともとそういうのがあるんで。まあだったら、むしろ環境を変えるっていうよりは自分が変わるっていう風なのに重きを置いているじゃないですけど、大学生活ではそういうのを中心にしよう、っていうのがあるんで。

遺児学生のあいだでは、活動における「成長」ということがしばしば話し合われる。それはこのような、活動に取り組むまでは知らなかった経験をすることによって、あらたにできることが広がったという意味でもちいられているのである。

## 5. 2 活動の集まりを維持することのなかに見いだされる楽しみ

つぎに、活動の集まりの秩序を維持してゆくことのなかに見いだされる楽しみというのは、たとえば、Dさんが活動に参加する理由として、「ひとに会いに来て」ということと、「独特な雰囲気」を味わいたいということを挙げていることに示唆される方法である。

おれも、ひとに会いに来てるっていうのが多いですね、みてる。独特な雰囲気ですね。まるあの、あれを味わいたいというやつが、いたりいなかったり。

すなわちそれは、あしなが運動の活動の場における相互作用とそれをつうじて形成される関係についての魅力ということになる。その魅力というのは、ひとつには遺児学生自身が、これまで見てきたような重層化した秩序を形成するなかの相互作用に関与することによって見いだされるものであるが、それだけではない。まわりの遺児学生どうしの相互作用のようすを見ることによってもまた、その魅力は見いだされるのである。

たとえばAさんは、会議において「活動をするモチベーション」について話し合うとき、それを自身にとっては「もうするもんだと思ってるから」と、自身にとって関係のないことだとしている。しかし彼女は、そうすることによって、活動に恒例の「イベントでいいなと思って」その話し合いを見ているのだという。彼女にとっては、そうした光景が目前に広がることこそが活動に取り組む「スイッチ」となっていて、その集まりに加わっていることこそが、Aさんにとっての楽しみとなっているのである。

もう、高校生のときからやってたから、大学生になったらやるものがあったりまえだと思ってたから。活動するモチベーションとかかーとかかって。会議が盛り上がりつつも、もうするもんだと思ってるから。

まあ、でもなんか、季節が来たなと。自分のなかでこう、そういう季節が来たなっていうスイッチにして、そういうのでこう、「やるぞ」ってい

うモチベーションあげてくひともいるから、それはそれで、まあイベントでいいなど。思っています。

## 6. おわりに

ここまで見てきたように、遺児学生は活動に継続的に参与するにあたって、重層化した秩序を形成している。それは、第一にはあしなが運動が要請する「恩返し運動」の理念や役割に応じるための秩序であり、これは要請される役割に徹した振る舞いをする事と、「アツイ思い」をもつまわりの遺児学生を「恩返し運動」の担い手に重ね合わせて見いだすことによって形成される。第二は、「アツイ思い」をもつものとしてまわりの遺児学生からまなざしを向けられることに対処するための秩序であり、こちらは語りの水準で自身の振る舞いについて、それを役割距離をとりつつおこなっていたのだと語ってみせることによって形成されるものである。このように、遺児学生は振る舞いの水準と語りの水準でギャップを見せることによって「恩返し運動」の論理に対処する秩序を形成し、その上でそれぞれに継続的に活動に参与することを可能にする楽しみを見いだしていくのである。

本稿が明らかにしたことをやや一般化していえば、比較的継続的に展開され、制度化した運動にあらたに参与することとなる構成員は、継続的に活動に参加することを可能にするための楽しみをそれぞれに見いだすにあたって、運動の要請する論理に応えることが求められるということであり、かれらはそのための秩序を形成するということである。運動はこのような構成員によって、その継続性が担保されている側面があるというわけである。

なお、付言しておくならば、もちろん、このように重層化した秩序のなかで、本気で「思いをもてるひと」が出現して、運動に積極的に関与してゆく可能性は否定されない。その遺児学生は、役割距離を語る必要もなく、自らの問題意識にもとづく行動を向ける先として運動に取り組むことができるのである。そして、まわりの遺児学生もそれを肯定的にとらえることとなる。そのような遺児学生の存在によってこそ、「やる気あるやつだけ」ではない、遺児学生の活動をする集まりの維持は担保されるのである。

また、「恩返し運動」の論理や「アツイ思い」をもつということに役割距離をとっているのだと語る遺児学生にとって、あしなが運動での経験というのは、そのように語るなかでなほ一度は遺児をめぐる問題を自身の問題としてとらえてみせる機会となっている。このことに目を向ければ、あしなが運動は遺児学生にとって、自身に向けられる遺児という類型のもつ社会的位置を学ぶ機会となっているのである。そしてその上で、かれらが役割距離を呈示してゆくということは、その遺児という類型のもつ社会的位置を相対化してゆく機会ともなっているのである。



## 註

- (1) あしながさん制度は、J. Webster の小説『あしながおじさん』に着想を得た寄付制度である。寄付者は「あしながさん」と呼ばれていて、任意の期間、任意の金額を遺児の奨学金として寄付をすることによって、遺児の進学を支援する。あしながさん制度による寄付の総額は、年間10億円を超える。
- (2) おなじ論理で、遺児学生は、海外遺児支援をおこなうウォーキング・イベント「あしながPウォーク10」の開催も手がけている。
- (3) あしなが学生募金に配布されるチラシから。  
なお、……は中略を示す。以下おなじ。
- (4) あしなが運動における「恩返し」のもつ論理の内実についてのさらに詳細な検討は別稿に譲ることとしたい。「恩返し」の思想は、あしなが運動の歴史的展開において重要な役割を果たしてきた。歴史社会学的な関心からあしなが運動における「恩返し」の思想の意義をとらえたものとして、副田（2003）が挙げられる。
- (5) 具体的な活動を展開する最小単位の「県」の水準でみれば、たとえば16人いた大学1年生が10人ぐらい、「どっかにいっちゃいました」（Aさんへの聞き取りから）ということになる。各学年の遺児学生は1年も経てば「もう4人か5人しかいない」（Aさんへの聞き取りから）という割合でしか残っていないのであり、かれらの参与によって、活動は成り立っているということである。
- (6) 具体的には、生活クラブ生協・北海道による社会運動の停滞の原因は、班によって培われた生活クラブ生協・北海道の理念や組合員意識の共有が困難になってきたことに起因する、生活クラブ生協・北海道において形成される班制度のシステム不全に求められている。  
すなわち西城戸は、班の構造とそこに埋め込まれた運動文化、その変化をとらえて、「停滞」の様相を呈している3つの要因を示しているのである。その要因とは、①班別共同購入システムから戸別配送システムの導入というシステムの変更によって、組合員同士の相互作用の機会が減少し、組合員としてのアイデンティティの確立が困難になったこと、②個人主義化という組合員自身の意識の変化によって、生活クラブ生協・北海道の運動理念を受け入れる素地を持った組合員が減ってしまったこと、③生活クラブ生協・北海道の主要な社会運動が1990年代から次々と外部化し、活動的な組合員が流出したことの3つである。
- (7) 脇田は、「運動組織を分析単位としながら、社会運動を、組織と資源との関数として捉えようとする」（脇田 1997：58）資源動員論によるアプローチではとらえることのできない、環境運動の過程における、環境運動に参加したひとびとの変容をとらえる視角として、変身という概念を用いている。変身概念を用いることによって可能となるのは、「環境運動におけるひとびとを、創造的で独創的な存在であると同時に、環境問題や運動組織、そして行政による環

境政策といったよりマクロなレベルからも影響を受ける存在として把握すること」(脇田 1997:62)である。

- (8) 脇田は変身概念を明確に定義していないが、同書のなかで編者の荻野昌弘(1997)は、変身の一般的特質として①身体が加工されている点と②空間の変化／移動を伴う点を挙げている。脇田のいう変身とは、石けん運動に取り組むことによる、そのひと自身のライフスタイルや思考の変化をさしていると思われる。
- (9) なお、「喜びとしての変身」というのは、「自己の内に生まれる、ある意味で、必然性をともなった喜び」(脇田 1997:74)を見いだすことによる変身であり、「強制としての変身」というのは、組織の持つ力に大きく規定され、義務と苦痛をともなうものであるとされる。(脇田 1997:78)。
- (10) 具体的にはD. Riesman (1961=1964)の他人指向の類型のうち、ボランティアを主導する大人たちを自律型、ボランティア活動に関わる若者たちを適応型とアノミー型と位置づけ、理論的な考察をおこなっている。
- (11) Kaufmannは、浜辺でトップレスになるという行動が、どのような規範が生成されることによって可能になっているのかを論じている。
- (12) ただし、Kaufmannは、「基準とはいっても実際は偽物で、見かけ上は完璧で心安らぐものではあるが、その裏では解釈が非常に混乱していることである。基準が曖昧になればなるほど、ガードレールの役割は、最も公式的な側面において儀式化された行動に任されることになる (Kaufmann 1995=2000:332)」ということに注意を向ける。
- (13) なお、〔 〕内は筆者による補足説明。以下おなじ。

### 【参考文献】

- あしなが育英会, 2011, 「活動・収支報告」, あしなが育英会ホームページ, (2011年12月12日取得, <http://www.ashinaga.org/about/index.html>).
- Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday.(=1974, 石黒毅訳『ゴッフマンの社会学 1 行為と演技－日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- , 1961, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Indianapolis: Bobbs-Merrill.(=1985, 佐藤毅・折橋徹彦訳『ゴッフマンの社会学 2 出会い－相互行為の社会学』誠信書房.)
- , 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, New York: Free Press of Glencoe.(=1980, 丸木恵祐・本名信行『ゴッフマンの社会学 4 集まりの構造－新しい日常行動論を求めて』誠信書房.)
- , 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*,

- Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall.(=1980, 石黒毅訳『ステージマの社会学-烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- 原田隆司, 2000, 『ボランティアという人間関係』世界思想社.
- , 2006, 「ボランティア活動からみた若者論の試み」『フォーラム現代社会学』5 : 16-24.
- , 2010, 『ポスト・ボランティア論-日常のはざまの人間関係』ミネルヴァ書房.
- Kaufmann, J.-C., 1995, *Corps de femmes, regards d'hommes : Sociologie des seins nus*, Paris : Nathan.(=2000, 藤田真利子訳『女の身体, 男の視線-浜辺とトップレスの社会学』新評論.)
- 西城戸誠, 2008, 「生活クラブ生協・北海道による運動-社会運動の「停滞」「成果」と連帯のゆくえ」『抗いの条件-社会運動の文化的アプローチ』人文書院, 167-206.
- 荻野昌弘, 1997, 「社会学の変身・変身の社会学」宮原浩二郎・荻野昌弘編『変身の社会学』世界思想社, 1-23.
- Riesman, D., 1961, *The Lonely Crowd : A Study of the Changing American Character*, New Haven : Yale University Press.(=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房.)
- 副田義也, 2003, 『あしなが運動と玉井義臣-歴史社会学的考察』岩波書店.
- 玉井義臣, 2010, 『サイコ・クリティーク 13 だから, あしなが運動は素敵だ』批評社.
- 脇田健一, 1997, 「変身する主婦」宮原浩二郎・荻野昌弘編『変身の社会学』世界思想社, 57-86.